
ポケモンダンジョン空の探検隊

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンダンジョン空の探検隊

【Nコード】

N2047Y

【作者名】

燕

【あらすじ】

ポケモンダンジョン空の探検隊ーアレンジです。

Chapter 1 嵐の中で・・・

嵐の中激しい雷雨が怒りが聞こえて来る。

雷雨

《ゴロゴロ》

《ザーツ》

「大丈夫か!？」

「ああ、くそっ！」

《ガゴーツ!!》

「うわあああ！」

ある日の暮れ方一匹のポケモンはギルドの前でうろろうろとしていた・・・。

「今度こそ入るんだ！」

ポケモンはギルドの前にある網の上に乗ってみた・・・。

すると・・・。

「足型発見！足型発見！この足型はイーブイ！」

「うわっ！」

突然、網の下から誰かの声が聞こえたので・・・
イーブイは驚き網から足を退けてしまう。

「ビツクリしたあ！」

イーブイは腰を抜かしていた。

「・・・今日もダメだったこれがあればギルドに入れると思ったんだけどな。」

イーブイは首に付けていたある石を手を持った。

その石には紋章の様なのが書かれていた。

「はあ、海岸に行こ・・・」

しょんぼりとした顔をしたイーブイは海岸へと向かった。

「おい、あれ見たかドガス？」

ドガス「嗚呼、見たぜズバット。あれはお宝に違いない。」

ズバット「くくくつ。」イーブイは海岸へ向かった・・・。

「うわあ♪」

イーブイは海岸で見た光景は太陽の光でオレンジ色に輝く海とクラブ達が 泡を出し、ふわふわと浮いていて、それは綺麗な光景だった。

「この景色が一番落ちてくよ……。……。あれ？」

イーブイは浜辺の辺りを見渡すとそこには倒れているポケモンがいた。

「あっ！誰か倒れてる！君、大丈夫！？」

イーブイはそのポケモンを起こす様に揺すった、

「……。ん〜。」

辛うじて生きている様だ

……。とイーブイは思った。

「大丈夫、君？」

「だい……。」。」

そのポケモンはイーブイを見ると黙ってしまった。

「……。大丈夫？」

「えっ！！？ポケモンが喋ってる！？」

そのポケモンは黙った後に驚いた。
まるで初めて見たような驚き方だった。

「君、本当に大丈夫？それに君もポケモンでしょう？そんなに驚かなくても……。」

「何言ってるんだ君は？僕は人間だ！」

「何言ってるの？は僕の台詞だよ。人間？何処から見てもポケモンでリアルだけど？」「えっ？」

リアルは自分の体を見回した。

耳は犬のように立っていて尻尾もあって体毛もあった……。

「何でポケモンになってるんだ〜！」

黙る、驚くの次は叫ぶのかよとイーブイは思った。

「君、怪しいポケモン？最近、お尋ね者がうようよ入るらしいけど……。」

「怪しいのはお前だろう!？」

「私はお前じゃない。名前がちゃんとあるんだから！私の名前はレイス！貴方は？」

「ぼっ、僕はレックスだ。」

レイス「レックス……うん、君は怪しいポケモンには見えないな♪疑ってごめんね？最近物騒だから。」

レックス「そうなのか……。だが僕は人間何だ。」

レイス「人間？でもき・・・うわっ！」

ドガース「おっと！ごめんよ！？つい足が滑っちまった。」

レイス「むっ！今の態とがましい！」

ズバット「わざとじゃないよ。それとお前が落としたこのお宝の様な石は君のかな？」

さっきのタックルで石は砂の上に落としていた。

レイス「そっ、それは私のよ！」

ドガース「ダメだな、この石は俺達が貰おう。お前は俺達を疑ったからな。」

レイス「あっ、返してよ！？返さない！」

ドガース「返さないとどうするんだ？俺達から無理矢理奪い返すのか？そのちっぽけな勇気でか！？」

レイス「ぐっ・・・。」

レイスはがたがたと足を震えていた。ズバット「何だ、来ないのか・・・。心が弱いポケモンだな。」

ドガース「ハハハッ！」

レイス「ぐっ！」

レックス「お前等！？レイスが大切にしている石返してやれよ！？」

レイス「レックス？」

ドガース「ほう、今度はお前が俺達を齒向かう気か？」

レックス「だったら何だってんだ！？それはお前等の物じゃないだろう？返さないなら力づくで返して貰うけど！？」

レックスは戦闘体制に入り相手を睨んだ。

ズバット「・・・良いだろう。場所は海岸の洞窟の奥地で待ってるぜ！？」

ドガース「くっ、来なかったらこの石は俺達の物だ。」

レックス「良いぜ。」

レイス「レックス！？」

ズバット「それじゃあさらばだ。」

ドガース「くくくっ。」

ズバット達は海岸の横にある洞窟の中へと入って行った。

レイス「取り返してくれるの！？」

レックス「嗚呼！レイス行こう！海岸の洞窟へ！！」

レイス「わぁ♪うん！」

レックスとレイスは海岸の洞窟へ向かったのだった・・・。

Chapter 1-2 タッグプレー

レイス「私の宝物……。」

レックス「……大丈夫だ、俺達の力で奪い返そう!」

レイス「レックス……うん!」

レイスは元気を取り戻し戦いへと近づいた。

レックス「薄暗いな、洞窟の中……。」

レイス「うん。」

レックスとレイスは先を進んだ。

レックス「ん? あれは何だ?」

レイス「えっ?」

レックスの前にはポケモン達がいた。

カブト、シェルダーにサニーゴがいた。

カブト「海岸の洞窟に何の様だあ?」

シェルダー「荒らし魔だ! 荒らし魔に違いない!」

サニーゴ「やっつけるしかないわね。」

三匹は戦闘体制に入りレックス達に向ける。

レイス「違うよ！？今私達は追い掛けてるポケモンが入るの！」

カブト「信じられんなぁ～お前達を倒す！」

レイス「ぐっ。」

レックス「話相手になれる奴じゃない様だ。レイスこいつ等を倒そう！」

レイス「えっ、うん！」

レックス達も戦闘体制を構え・・・戦う。

カブト「泡あ！」

口から泡を放出したカブト、それをレックス達は避ける。

レックス「こんなの避けられる！」

レイス「うん！」

サニーゴ「体当たり！」

レックス「こんなの簡単に避けられる！」

レイス「（・・・今だ体当たり！！）」

サニーゴ「うわっ！」

レックスに攻撃してきたサニーゴをレイスは隙を狙って攻撃が当たった。

レックス「ナイス！」

レイス「へへ♪」

レイスは照れた。

シエルダー「俺を忘れるなよ！？噛み付く！！」

レイス「えっ？」

レイスの背後にはシエルダーがいたのだった。

レックス「レイス！砂かけ！」

レイス「えっ？うん！喰らえ！」

するとレイスの後ろ脚で 泥、砂をシエルダーの顔面にぶっかける。

シエルダー「うっ、小癪な！」

レックス「電光石火！」

シエルダー「ぐあ！」

シエルダーは電光石火に認識せずに当たった。

カブト「ひいゝ！」

サニーゴ「強い・・・。」

シェルダー「くっ！お前等ゝ逃げるぞゝ！」

サニーゴ「そのつもりよゝ！」

カブト「ひいゝ！」

三匹は逃げて行った。

レイス「勝っちゃった・・・。」

レックス「よっしゃあ！」

レイス「やったゝ♪」

二匹はとても喜んだ。

レックス「さっ、行くぞレイス！」

レイス「うん♪」

そして二匹は奥地へと向かった。

ズバット「へへっ、来たぜ？あいつら。」

ドガース「ぐへへっ、そうだな♪」

レイス「私の、私の遺跡のカケラを返してよ！あれは私にとっての大切な宝物何だから！」

ドガース「ほう、あれは遺跡のカケラと言うのか？なる程、さらにこの宝に興味を持ったぜ。」

レックス「返して貰おうか？石と蝙蝠！」

ドガース「石だと！？」

ズバット「蝙蝠！まっ、そうだが何かムカつくぜ！」

レックス「ははっ♪こりゃあ良いあだ名♪石と蝙蝠♪」

ドガース「調子こきやがってえええ！！ズバットやるぞ！」

ズバット「へへ、分かってる！」

レックス、レイス

VS

ズバット、ドガース

ズバット「超音波！」

するとズバットの超音波が聴覚を奪う。

レイス「う、五月蠅い……。」

レックス「流石、蝙蝠と言った所か……。」

ドガース「ヘドロ攻撃！！」

レックス「くっ、今、忙しいのにそんな汚いもん投げつけてくるな石！」

そう言いながらレックスはヘドロ攻撃を回避する。

ドガース「ば、馬鹿にしゃがってえええ！」

ズバット「体当たり！」

レイス「くっ。」

レイスは体当たりを回避した。

レイス「砂かけ！！」

ズバット「へへっ、馬鹿か？地面タイプの攻撃はきか・・・！」

レイス「今だよ、レックス！」

ズバット「何！？」

レックス「電光石火！！」

ズバット「ぐああ！（まさか・・・！）」

レックス「どうだレイス！？俺の作戦は！？」

レイス「凄い！レックスの言う通り！」

ドガース「作戦だったのか！？」

ズバット「ぐっ！もうその手は引っかか・・・！」

レイス、レックス「噛み付く！！」

ズバット「ぐあああああ!!」

ズバットはレイス達の噛み付くで倒れた。

ドガース「なっ!ズバット!!」

ズバット「・・・すまん。」

レックス「さて、お前だけだ石野郎!」

ドガース「ちっ、これは返してやるよ!」

ドガースは遺跡のカケラをレイスに投げ捨てた。

レイス「私の大事な物!投げないでよ!」?

レックス「返したからって逃がさ・・・」

ドガース「黒い霧!!」

するとドガースから黒い霧を放ち視界を消されてしまう。

レックス「ちっ、逃げられたか。」

レイス「・・・。」

そして、黒い霧が晴れた時にはいなかった。

レックス「逃げたか。」

レイス「レックス有り難う!!」

レックス「ああ、うん。」

レイス「遺跡のカケラを取り返してくれて有り難うレックスのお陰だよ……うう……。」

レイスは嬉しい涙を流していた。

レックス「な、泣かなくても良いだろう？それに遺跡のカケラって何なんだよ？」

レイス「私も分からない

……けどこの遺跡のカケラの謎を解きたいと思ってるんだ。……
そうだ！」

レックス「ん？」

レイス「レックスって行く当てはある？」

レックス「ないなあ（これからどうしよう。）」「レイス「だったらお願い！私と一緒に探検隊をやろう!？」」

レックス「探検隊……って何？」

レイス「あつ、探検隊って言うのはいろんな場所を探検して財宝やポケモンの救助を行うんだ♪それにレックスが人間だとしたら何故ポケモンになったのか分かるかもしれないよ？」

レックス「……そうか。」

・・・そうだな。」

レックスはレースに笑みを見せた。

レース「どう？やっぱダメ？」

レックス「いや、やるよ探検隊！こうして何にもしてないよりマシだからな。」

レース「本当！？やった〜！」

レックス「レース世話になるぜ！？」

レース「こちらこそ！」

こうして探検隊の冒険が始まったのだった・・・。

Chapter 2-1 ギルド入門

レイス「有り難うレックス！早速だけどついて来て！？」

レックス「お、おい。普通についてくよ？」

レイスは前脚でレックスの背中を押してプクリンのギルドまで連れていった。

そして薄暗い空になっていた。

ギルドは両際に火でギルドを燈していて前が見えやすくなっている。

レックス「何だ此処？薄気味悪い所だな。」

レイス「私も思ったよ、けど此処は探検隊の集まり場所でもあって修行場所でもあるの。」

レックス「ふん。」

レイス「よし、今度こそギルドに入って見せる！レックスだって入るんだから！」

レイスは目の前にある網目の様な木材の上に乗った。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足型！？誰の足型！？」

レイス「ひゃっ！」

レイスはびっくりして声を出した。

レックス「……（俺もビックリしちゃったじゃないか。）」

下から声が聞こえてくる事にビックリして、それに釣られるレックスであった。

「足型はイーブイ、足型はイーブイ！」

レイス「我慢……我慢……レックスが入るから我慢
……！」

「もう一匹も入るだろう？お前も乗れ！」

レイス「レックスの事だと思うよ？此処に乗れって……。」

レックス「ああ？俺もかよ？」

「早く上に乗れ！」

怒鳴られた……。

レックス「へいへい。」

レックスは仕方なく上に乗った。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足型！？誰の足型！？」

「・・・え〜と。」

「どうした!？」

「・・・分からない。」

「分からない!？ディグダ？それはお前の仕事だろう!？」

「・・・多分だけど・・・リオル・・・多分だけど・・・リオル・・・。」

「多分だと!？」

レックス「どうやら下で揉め事をしてるらしいな。いつまでこの上に乗させる気なのだろう・・・。」

レイス「・・・さあ。」

レックスは網の上で胡座をかいていた。

「・・・だが怪しい者ではないみたいだ。よし、・・・入れ!」

誰かから許可をもらうとギルドの入口である。
門が開いた。

レックス「おお、（怪しい者ではないとは言われたが俺達にとっては怪しい者だと思った方が格別だな・・・。）」

レイス「やった!探検隊になれるんだ♪」

レックス「まだ分からんだろう？」

レイス「なるよ！」

二匹は揉め事を言いながらはしごで下りた。

レックス達は一つ降りるとそこには沢山の探検隊達がいた。

レックス「凄い入るな。」

レイス「わあ！有名な探検隊達が入る！」

レックス「有名な探検隊？何処のどいつ？」

レイス「いろいろ入るんだけどね、一番右側の奥に8匹のポケモンが入るでしょ？あの方達は『絆』っていう探検隊メンバーなの♪」

レックス「絆ね。」

レイス「で、前の奥に集まってる方達は『フレンド』っていう探検隊、左側にいる探検隊も有名で『スカイ』っていう探検隊メンバー何だ♪」

レックス「そんなに有名人がいるのか？だとしたらこのギルドは凄いな！？一体頭は誰だって言うんだ？」

「あの方？貴方達は探検隊ですか？」

レックス「……（俺と同じ種族だ……。）」

レイス「あっ！あの私達はですねその／＼／＼」

レックス「何いきなり緊張してんだよ？」

レイス「だ、だって、有名人だよ！？」

レックス「有名人ねえ。」

「どうしたんですか？」

レックス「いや、何でもない。まあ、来た理由は探検隊になると言う事です。」

レイス「あっ、私が言おうと思ったのに！」

レックス「面倒！」

「仲が良かったですね♪あっ、自己紹介がまだでした。僕は『絆』の一匹です。リオンと申します。」

レイス「こっ、こちらこそ！私はレイスです。」

レックス「俺は、レックス……。」

レイス「さっきから失礼だよレックス！？」

リオン「ま、まあ、良いですよ。敬語じゃなくても……。」

レイス「……すみません！」

レックス「・・・（なら良いじゃん。）」

「どうしたの？ リオン？」

するとリオンの後ろから誰かがリオンの名前を呼んだ。

リオン「あっ、ローズ新入りだよ♪」

リオンはローズに満遍な笑みを見せた。

レックス「・・・（急に笑顔になりやがった。）」

ローズ「探検隊の新入りさん？」

さっき言い忘れたがリオンの種族はリオルであり、ローズはロズレイドだ。

リオン「うん！」

レックス「ちわゝす。」

レイス「また・・・失礼だよ!？」

レックス「はいはい。」

ローズ「探検隊になるんですね？これから宜しくお願いします。」

レイス「こちらこそ！」

「何や？新人さんか？」

すると横から蜥蜴の様に尻尾には火がついていたポケモンが近寄ってきた。

レイス「あっ！フレンドチームのアイルさん！」

アイル「なんや？ウチの事知ってるんか？」

レイス「はい！知ってます！」

レックス「・・・（話し方が関西弁だし。）」

「どうしたのです？アイルさん？」アイル「ああ、新人りさん見たいなんや〜。」

レイス「マルクさんですか！？」

マルク「・・・うん。」

レックス「・・・（意外にクールだな。）」

「おっ、見かけない奴だな！？誰だお前達は？」

レイス「あっ！オオスバメのオニキスさんだ！」

オニキス「いかにも俺はオニキスだ。お前は誰だ？」

レックス「新入りと言う訳です。」

レイス「私もレックスと同じです。」

オニキス「そうか！俺達の仲間になるか？！？宜しい宜しい！それじゃあ入れ！」

レックス「いや（誰も仲間になるなんて言っていないんだけど・・・。）」

レイス「えっ！良いんですか！？」

オニキス「良いぞ！」

レイス「それじゃ・・・」

「ギルドに入って来たのはお前達か？」

すると後ろから聞こえてきた。

鸚哥類の様な鳥で頭は♪の形をしているポケモンだった。

レイス「あっ！プクリンの親方の一番弟子のペラップだ！」

ペラップ「いかにも、私の事を知っている様だな？何の用で来たのだ？」

レイス「はい！私達、探検隊になりたいんです！弟子にしてください！」

ペラップ「ええー！？」

レックス「???」

レイス「だ、ダメですか？」

ペラップ「・・・（今時珍しい子だよ、探検隊になるだなんて・
・脱走するポケモンも入るって言うのに・・・。）」

レイス「あの？ダメ何でしょうか？」

ペラップ「いやー！そんな事ないよー♪探検隊になるんだね♪それ
は大歓迎だよー♪」

レックス「・・・（こいついきなり態度変わったぞ！？何かやばそ
・。。。）」

レイス「やったー♪」ペラップ「さあ♪下の階には親方様がお待ち
だ♪ついて来なさい♪」

レイス「はい！」

レックス「怪しい・・・。」

そしてペラップの後について行き、レイス達はさらなる下の階へと
下りた。

ペラップ「さあ、此処が親方様のお部屋だ。くれぐれも失礼のない
ようにな？」

レイス「はい。」

レックス「・・・（この部屋にあいつらの頭が入るのか）」

そして部屋の中へとペラップとレックス達は入った。
すると親方が後ろを向きながら座って動かずにいた。

ペラップ「親方様、新入りを連れてまいりました。」

レックス「・・・（これが親方？）」

後ろ姿はほぼピンク色の長丸いポケモンだった。雰囲気では全然迫
力が出て来ないと思った・・・レックスだった。

「・・・。」

「親方様？」

「・・・はっ！ やっ、やあ！ 君達！ 探検隊になりたいそうだね？」

すると親方と言うポケモンは180度身体を回転させて前を向いて
いた。

口から涎を少々垂れていた。

レックス「・・・（こいつ・・・寝てたな。）」

ペラップ「親方様？ まさかねっ・・・」

親方様「ち、チーム名を教えて♪」

レイス「チーム名はもう決まっております！」

レックス「・・・（完全に一番弟子をスルーしたなこいつ）」

ペラップ「……。」

親方様「もうチーム名は決めてたんだね♪それじゃあ教えて♪」

レイス「はい！名前は『ディレック』です！」

親方様「ディレック？」

レイス「はい！私とレックスの名前から取って『ディレック』と言う名前にしました♪」

親方様「へえ！お互いの名前でチーム名を作ったんだ♪良い名前だね♪よし、君達はこれから探検隊だ♪行くよ！？たあああああ
ああ！！！」

すると部屋中親方の声が鳴り響く。

ペラップ「流石は、親方様のハイパーボイス！耳が！」

レックス「……（な、何だ！？この恐怖感は！？それに五月蠅い・
・・。）」

レイス「耳が！」

親方様「あああああああ！！！！よしこれでOKだよ♪君達はこれから探検隊だ♪」

すると親方の咆哮がおさまり部屋の振動が収まった。

レックス「（一体何を……？）」

レイス「強烈〜！流石親方様です！！」

プクリン「探検隊になった証しにこの探検隊セットを授けよう♪」

するとプクリンから箱を俺達の前に持ってきた。

レイス「探検隊セットって！？まさか！？」

ペラップ「うむ、開けてみなさい。」

レイス「はい！」

レイスは箱を開けた。

すると中にはいろいろな物が入っていた。

レイス「うわぁ〜！探検隊バッチに！不思議な地図とトレジャーバツクだ〜！！」

ペラップ「中にまだあるぞ？」

レイス「えっ？」

レックス「本当だ、・・・スカーフに・・・リボン？」

プクリン「それは防御スカーフとブラウンリボンだよ♪きっと探検で役立てるアイテムなんだ♪」

レイス「わぁ〜凄い！」

レックス「・・・（いろんな物貰ったな〜。）」

ペラップ「明日から厳しい修業になるからな？」

レイス「はい！」

レックス「・・・（厳しい！？）」

レイス「レックス！明日から頑張ろうね！？」

レックス「おっ、おう・・・。」

ギルド入門・・・

Chapter 2 初めての依頼

朝6時…

「起きろおおー!!」

もの凄い声がレックス達を襲った。

「俺はギルドの中の一匹ドゴームだああ!!寝てんじゃねえー!!」

レックス「…(鼓膜が敗れる。)」

レイス「…(何?この大きな声。)」

ドゴーム「起きろおおー!!」

レックス「んああ(耳が痛い。)」

レイス「もう起きるから。」

ドゴーム「さっさと起きろおおー!!朝会に遅れるぞ!!」

ドゴームは集会場の所へ向かった。

レイス「…(な、なんか…あつたけ…そうだ!」レックス!寝てる場合じゃなかったよ!私達ギルドで修行する事になったの忘れた!」

レックス「あつ、そうだ！は、速く！集会場へ向かわないと！」

レイス「うん！」

レックス達は朝会へと向かった。

そして…。

ドゴーム「遅いぞ新入り！！何、さっきまで寝ぼけてたんだあああ
！」

ペラップ「ドゴーム！お前の声は五月蠅い！！」

ドゴーム「うっ…。」

レックス「…（ざまあ見ろ。）」

ペラップ「全員集まったな？親方様！全員集まりました。」

すると親方の部屋の前にいた扉が開き親方プクリンが現れた。

プクリン「…ぐー。」

弟子達…（親方様は相変わらず凄いよなあ。）

弟子達…（嗚呼、目を開けながら寝てるんだもんな。）

レックス「…（目を開けながら寝ている？それはすげえな。）」

レイス「…眠い。」

ペラップ「はい、有り難きお言葉頂戴しました。それじゃあ誓いの言葉ー！」

弟子達「ひとーつ！仕事は絶対さぼらない！」

「ふたーつ！脱走したらお仕置きだ！」

「みつっー！皆笑顔で明るいギルドー！」

レックス「…（誓いの言葉かぁ…。）」

レイス「…（覚えなきゃ！）」

ペラップ「さあ、皆！仕事に取り掛かるよー！？」

弟子達「おー！！」

そして皆は仕事の持ち場に行ったのだった。

レックス「で、俺達は何をすれば良いんだ？レイス。」

レイス「うーん、わかんない♪」

レイスは笑顔で答えた。

レックス「…（おい！知らないのかよ！？）」

ペラップ「お前達！うろろうろしてない、お前達はこっちだ。」

レックス「…ん？」

レイス「あ、はい！」

そしてペラップのあとに付いて行く。

するとギルドの階で中央と言った所で有名な探検隊達がいた所だ。

ペラップ「お前達はまだ初心者だ。左側の依頼をやって貰う♪」

レックス「…（左？右側何だよ？）」

レイス「依頼ですね？」

ペラップ「そうだ。近々依頼が増えてきてな…。いくつかの場所に災害が起きているらしい。その影響なのか悪意を持ったポケモン達も多くなってきたのだ。」

レックス「時の狂い？悪意を持ったポケモン？」

レイス「あ、レックスは知らないんだっけ（人間って言ってたし記憶喪失にもなってるから。）」

ペラップ「そうだ、時の狂い…何故、時が可笑しくなったのかは分からないのだ、それと悪意を持つようになったポケモンも…。」

レックス「悪意を持つようになったポケモン…（あいつらの事か？）」

レイス「レックス覚えてるよね、私達から遺跡のカケラを盗もうとしたポケモン達の事…。」

レックス「嗚呼、分かってる蝙蝠と石だったな。」

ペラップ「蝙蝠と石？」

レイス「あ、何でもないんですよ！？（レックス！面倒な事を言わないで！？）」

ペラップ「まあ、とにかくこの依頼をやってもらおう。」

ペラップは依頼の紙をレイスの手に渡した。

レイス「えーと何なに？『どうもバネブーと申します。依頼の用件ですが：私の大切な真珠を落としてしまったのです。あれがないと私は生きる気になりません。どうか私の大切な真珠を見つけて下さいお願いします…。』って。」

レックス「それって単なる落とし物探しだろう！？」

レイス「そうですよー！もっと凄い依頼がやりたいです！」

ペラップ「おだまり！？お前達はまだ初心者何だよ！？下積みが必要なんだ！分かったら依頼を終わらせにこい！！」

レイス、レックス「は、はい！」

ペラップの説教で腰が抜けた二匹であった。

そして俺達はギルドの外にいた。

レックス「行くか、場所は何処なんだ？」

レイス「湿った岩場だって。」

レックス「湿った岩場か（場所知らないけど…）」

レイス「レックス…。」

レックス「何だよ？」

レイス「一つ聞きたい事あるんだけど良い？」

レックス「えっ？」

レイス「湿った岩場って………何処？」

レックス「………はっ？」

レイス「だからあ、…何処？」

レックス「…知らないのかよ！！？俺、お前を頼りに付いて来たんだぞー！？」

レイス「ごめ〜ん！本当に知らないんだよ〜！」

意外な答えが出て来たレイス…。
どうすんだよ…。

「お悩みか？」

レックス「あん？」

レックスの目線には二匹のポケモンがいた。

レイス「貴方達は？」

デイン「僕はデイン。」

シャウラ「俺はシャウラチーム名は”シャデイル”で、まだ二週間しか探検隊やってない新人だ。」

レイス「あっ、そうなんですか？ 私達も昨日新入りになったばかりです♪」

デイン「それは知ってるから良いよ。」

レイス「えっ？」

シャウラ「君達気づいてないと思うけど朝会で一番奥の列にいた訳だ。」

レイス「そ、それは気づきませんでした！ すいません！」

デイン「まあ、良いよ。凄い慌ててたし…。」

シャウラ「それより悩み事があったんじゃないのか？」

レックス「あっ、すっかり忘れてた。」

シャウラ「おい！ 忘れちゃいかんだろう！？」

デイン「まるでシャウラ見たいだな♪」

シャウラ「デイン！（言い返す言葉がない。）」

レイス「あの、実は私達『湿った岩場』の場所が分からなくて。」

デイン「ああ、調度俺達も行くよ。どうせだから一緒に行こうか？」

レイス「あつ、良いんですか!？」

レックス「それは頼もしいな。」

シャウラ「それじゃあ四匹で行くか。」

レイス「はい!」

レックス「良かった〜場所（湿った岩場）が分かるポケモンがいて♪」

レイス「それ私に刃向かってない？その言葉!」

デイン「はは♪大丈夫だよレイスもう一匹地図が読めない奴も入るからさ♪」

シャウラ「デイン！さっきから俺に大して喧嘩売ってないか!？」

デイン「…全然♪」

シャウラ「嘘付け!！」

こうして四匹は湿った岩場へと向かうのだった。

Chapter 2-3 シャディル

ディレックスのレイス、レックス。
シャディスのシャウラ、ディン。

湿った岩場へと向かう。

ディン「もうすぐだよ。湿った岩場は足が取られるから気をつけて。」

レイス「えっ？ どうしてですか？」

レックス「湿った岩場だからだろう？ 岩場が湿っている。湿っているからこそ足が取られる。」

レイス「成る程お〜♪」

レックス達はひたすら歩き湿った岩場へ向かった。

シャウラ「ディン、まだ着かないのか？」

ディン「此処だよ。」

レックス「此処が岩場か
・・・。」

レックスの見た湿った岩場の光景からすると・・・

大きい岩があちらこちらに散らばっていて・・・。

ほとんどが太陽の視界を奪っている。

大きい岩の下には小さな岩があり・・・湿っている岩が多い・・・。

大きい岩と小さな岩の間には大きな空洞が出来ていたのだ。

それがレックスの見た光景・・・。

太陽が通らない場所と・・・通る場所が見える。

レックス「光が通る場所を辿って行こう。」

シャウラ「だな。」

そして・・・湿った岩場へと向かった。

シャウラ「暗いな・・・。」

レイス「足が滑る・・・。」

ディン「このまま真っ直ぐ進めば真珠があるかもしれないな。」

レックス「そういえばお前達は湿った岩場に用があるそうだが・・・。」

シャウラ「ああ、俺達はお尋ね者に用かな。」

レイス「お尋ね者？」

レックス「悪意のポケモンと言う事か・・・？」

ディン「そうだよ。」

レックス「まさか蝙蝠と石……。」

シャウラ、ディン「はっ？」

レイス「あっ、気にしなくて良いので！（もう蝙蝠と石の事何か忘れてよ！）」

俺だって分かってる……。ズバットとドガースにすまないと思っている。

たが仕方がないだろう？

例えるのがそれしかないのだから！

レックス「あっ、大きな光が見えるぞ！」

シャウラ「えっ？」

ディン「本当だ！」

レイス「もう暗い所は勘弁よ！光の先まで走りましょうよ！？」

シャウラ「そうだな。俺も飽きてきた。」

レックス「俺が先だ！」

レイス「あっ！ずるい！！」

シャウラ「離れるな！」

ディン「走るのがよ！」

そしてレックスに釣られて走らせられるシャウラ達であった……。そして光の先には噴水の様に水が流れていて。

岩の影なく太陽の光が輝いていた。

すると前にはピンク色に輝く真珠があった。

レックス「あつ、あった！」

レイス「あれが真珠ね♪」

シャウラ「真珠探しの為に来たの？」

レックス「いや、落とし物探しだよ。」

ディン「あゝ、落とし物ね……。」「

そしてレイスが真珠に近づいた時……。何処からかポケモンの声が聞こえた。

「バブル光線！！」

レイス「うわあ！」

レイスはバブル光線をすれすれに外れた。

レックス「誰だ！」

シャウラ「いや、俺達のターゲットだ！」

ディン「気をつけて皆！戦うよー！？」

「この真珠は誰にも渡さん！俺っちの物だ！」

レックス「ちっ！結局戦うのかよ！？蝙蝠、石の次が蟹か！？」

「蟹だと！？俺はキングラーだ！お前達を殺してやる！」

ディレック、シャデイルVS蟹^{キングラー}の戦いが始まる・・・。

Chapter 2-4 生と死!!

レックス「石と蝙蝠の次は蟹かよ!?!」

キングラー「俺はキングラーだ! 蟹、蟹言うんじゃない?」

レイス「レックス! もう石と蝙蝠は忘れてよ!」

シャウラ「だから石と蝙蝠って何だよ!?!」

ディン「何かの共通点!?!」

シャウラ「違うだろ!?! 戦いでも深い事でもないだろう!?!」

ディン「あつ、分かったぞ! 小説だ!」

シャウラ「だから違うだろう!?! 石と蝙蝠が小説の題名だとしたら何の話なのか分からねえよ!」

そして四匹は言い争っていた。

キングラー「・・・お前等、俺を嘗めてんのかごらああ!?! バブル光線!」

そしてキングラーは泡を大量に放出しレックス達に攻撃が行く。

レックス「石と蝙蝠と言うの・・・何か飛んできたぞ!?!」

シャウラ「えっ?」

そしてバブル光線がレックス達を襲った。

《バババババ！！》

ディン「うわあ！」

レイス「んっ！」

レックス「くそ！電光石火ああ！！」

レックスはバブル光線から無理矢理脱出し電光石火でキングラーへ一直線に向かった！

レックス「うおおおお！！」

キングラー「なに！？」

キングラーが気づいた時は目の前だった・・・！

そして！

レックス「喰らええ！」

キングラー「うあ！」

《バタン！》

キングラーに電光石火が当たり倒れてしまった。

シャウラ「なっ、何て奴だ・・・。」

レイス「レックス凄い！」

デイン「いくらなんでも無理矢理だって!? (勝ったけど・・・)」

レックス「はあ、・・・はあ。何とか勝つ・・・た・・・」

《グタツ・・・》

レックスはキングラーの近くで倒れ込んだ。

レイス「レックス！」

キングラー「・・・ぐっ、この野郎・・・良くもやりやがったなあ!?」

キングラーは起き上がり 腕バサミを大きく上げた
・・・。

レイス「れ、レックス！危ない!!」

キングラー「死ねえええ！ハサミギロチン!!」

そしてキングラーはレックスの頭へと向けて腕バサミを振り落としました。

レイス「レックス!!!」

シャウラ「サイコキネシス!!」

キングラー「何!？」

キングラーがレックスの頭を切り落とす前にシャウラはサイコキネシスで動きを止める。

シャウラ「レイス!! 今の内にレックスをこっちまで持ってくるんだ!」

レイス「う、うん!!」

そしてレイスはレックスの方へ走り向かう。キングラー「小癪な!」

キングラーは今だに動けずにいた。

レイス「レックス! しっかりして!？」

レイスはキングラーからレックスを出来るだけ離して一定の距離まで運んだ・・・。

キングラー「嘗めやがってええええ!! うおおおお!!」

するとキングラーはサイコキネシスに掛けられている中で無理矢理抜け出そうとしていた・・・。

力づくで体を少しずつ動かしていた。

シャウラ「ぐっ・・・! もう持たない!! デイン! 止めだ!!」

デイン「嗚呼!! 電気ショック!!」

ディンはキングラーに放った!!

「泥遊び!!」

シャウラ達「・・・!？」

すると何処からか泥の塊がキングラに浴びせた。

《ビリ、ビリビリ!》

キングラー「ぐっ!! 結構のダメージを受けたが助かったぜ! 礼を言うぞカラナクシ!!」

カラナクシ「どう致しまして! キングラー様!」

ディン「僕の電気ショックが泥状態で弱められた・・・。」

レイス「様付け?」

シャウラ「何だよ? お尋ね者はこいつだけじゃなかったのか!？」

キングラー「ふっ、それは違うな・・・湿った岩場にいたポケモン達だ。簡単に言えば・・・手なずけただけだ。」

シャウラ「そういう事か!」

カラナクシの他にも沢山のポケモン達が姿を現した。

キングラー「はははっ! お前達は俺には敵わないぞ!？」

シャウラ「くっ！」

レイス「沢山いるよ!?!」

ディン「ひー、ふー、みー・・・全部まとめて9匹入るよ!」

「キングラー様に刃向かう者は倒すのみ!行くぞお前達!」

「おお!」

同じ種類も入る奴もいるが種類的に入るのはリーシャン、カラナクシ、リリーラ、アノプス・・・そしてキングラー・・・。

そして、ディンとレイスそして俺・・・レックスは倒れてしまつて三匹で戦う事になる・・・。

シャウラ「苦しいな。」

ディン「いや!だがキングラー意外の奴なら戦闘力は低いはず!心折れずに戦えば何とかなるよ!」

レイス「そうだよ!負けてられない!」

シャウラ「そうだな、死んでたまるか!」

キングラー「やっちゃまえ!お前等!」

全員「おっ!」

シャウラ「来るぞ！」

リリーラ「絡み付く！」

するとリリーラの技、絡み付くをディンに絡み付こうとしたが回避するディン。

ディン「喰らうか！電気ショック！！」

絡み付くを避けて即座に
電気ショックを放つディン。

リリーラ「うわあああ！」

残り8匹・・・

リリーラ「背後にいるぜよ！絡み付く！！！」

ディン「しまった！」

そしてディンは背後にいたもう一匹のリリーラに絡み付けられてしまった。ディン「僕に絡み付いてて良いのかな？感電するよ！電・・・」

カラナクシ「泥かけ！！」

ディン「うわっ！」

カラナクシは泥かけをディンとリリーラの所に浴びさせた。

電気の技は通じない・・・。

リリーラ「計算ずみだぜよ!?!」

カラナクシ「ヒヒッ! まず一匹だ〜♪」

ディン「動かねえ〜!」

一方シャウラは・・・。

シャウラ「電光石火!」

アノプス「硬くなる!」

シャウラの電光石火を硬くなるで防ぐアノプス。

シャウラ「ぐっ! 硬い!?!」

アノプス「引っ掻く!」

シャウラの攻撃を防いだ後に攻撃を仕掛けて来るアノプス。

シャウラ「当たってたま!」

リーシャン「巻き付く!?!」

シャウラ「なっ!」

アノプス「ナイスだリーシャン!?!」

シャウラ「ぐあああ!」

そしてアノプスの引っ掻くがシャウラにヒットした。

アノプス「もう一回喰らえ!!」

レイス「体当たり!!」

アノプス「ぐぁ!」

レイス「叩く!!」

アノプス「ぐほっ!」

レイスはアノプスの攻撃を止め、シャウラの死は免れた。
アノプスは倒れ込んだ。

残り7匹・・・。

シャウラ「有り難う!・・・サイコキネシス!!」

シャウラは巻き付いているリーシャンに掛けて巻き付くから逃れる。

シャウラ「よくもやったな!体当たり!!」

リーシャン「うわぁ!・・・ま、・・・まだまだよ!」

レイス「体当たり!」

リーシャン「うっ!」

後6匹・・・

一方デインは・・・。

デイン「くそお！」

リリーラ「カラナクシ！痛ぶってやりんしゃい！！！」

カラナクシ「ヒヒ！了解！」

デイン「ぐっ！」

シャウラ「サイコキネシス！！！」

シャウラはデインの動きを止めているリリーラにサイコキネシスを掛け、デインは動ける様になった。

デイン「良くもやったなああああ！？お前等ああああ！！電光石火あああああ！！！」

デインはリリーラにダイレクトアタックをしてリリーラは回避する事なくヒットした。

リリーラ「うあああ！」

残り5匹・・・。

電光石火の動きによって泥状態を振り払う事が出来たデインは大技を繰り出そうとした。

デイン「許さないからなああああ！？喰らえ！放電！！！」

ディンはあちらこちらに 電気を落とし複数のポケモンに当たった。

「ぐぎゃあああああ！」

「ぐあああああああ！」

「うああああ！」

三匹を一気に倒す事が出来たディン。

残るは二匹・・・。

キングラーとその横に入るカラナクシであった。

レイス「ディン凄い！」

シャウラ「キレモードに入っちゃってるな。」

ディン「もう一丁！」

キングラー「止まれ！」

キングラーは呼び止める。

レイス「レックス！！」

キングラーは腕のハサミでレックスの首を差し向ける。
所謂人質・・・。

ディン「ぐっ……、卑怯な……！」

シャウラ「手出しが出来ない……（サイコキネシスを打ってもダメだ……）」

レイス「レックス……！」

キングラー「動くなよ！？こいつの命が欲しけりゃあな！？」

シャウラ「くそっ……。」

カラナクシ「流石キングラー様！人質とは考えましたね。」

キングラー「ふん、カラナクシ……あそこに落ちている木の枝であいつらの頸動脈を指せ……！」

レイス「えっ……！」

ディン「なっ……！」

シャウラ「……（絶対絶命だ。）」

カラナクシ「分かりやした！ヒヒヒ……！」

キングラー「さあ、カラナクシよ一歩ずつ近づいてあいつらの畏れを見させてくれ……！」

カラナクシ「ヒヒ……♪」

ディン「これまで……か……」

カラナクシが一步ずつこちらに近づく度に心から恐怖が湧き出てくる絶望感の様だった……。

絶望感と同時に憎悪が浮き出てくる……。

デイン「……（動けば……、動けば助かる……。けど……）」

キングラー「ふふふっ、畏れが見えるぞっ！あっ、そうだお前達に？選択を与えてやろう……。」

シャウラ「……！？」

キングラー「それは生と死の選択だ！お前達が足を一步でも動けばこいつ（レックス）の頸動脈を切り裂き殺すか……。それとも一步も動かずにただただ恐怖をゆっくりと味わいお前達の頸動脈を切り裂くか……。お前達が生を選べばこいつは死……。お前達が死を選ぶなら生をこいつに与えよう……。」

シャウラ「……ぐっ。」

デイン「死にたくない……。」

キングラー「おっ！死にたくないか！？お前は正直だなっ！体も震えているではないか？死ぬのが怖いのだろう？生きたいだろう？生きたいなら……。その足を一步踏み出せば良い……。一步踏み出せばお前は自由だあっ♪」

デイン「動けば生きれる

死にたくない・・・死にたくない・・・死にたくない！

シャウラ「デイン！？お前はそれで良いのか！？もし俺達が生きれば一生後悔するんだぞ！？どっちにしたって先は暗闇だ！！」

レイス「……うつ……。」「どうすれば良いの!? レックスなら……レックスならどうするの!?」

キングラー「あいつは命知らずだな？・・・カラナクシ♪・・・
あいつ（シャウラ）からやれええええ！・頸動脈は後だ！全ての
脈を切り裂いてしまえええええ！！！」

カラナクシ 「いえっさああ! !」

「うっ……！」

キングラー「そうだ、人質はこいつだけではなくあいつ（シャウラ）も人質としてお前の心を悪にしておしまおう
 ……！ お前の大切なポケモンをいたぶってあげてやろう！！ カウ
 ントダウンは10秒だあああ！！」

「グッ！ シャウラ！ 俺の事は気にするな！！」

「死にたくない……」

後
・
・
・
8
秒。

シャウラ「デイン！！」

デイン「死にたくない！！シャウラを殺したくない！！見殺しなんか出来ない！！！」

・・・5秒。

カラナクシ「ひひっ！」

レイス「レックス！！」

デイン「うおおおおおおお！！！！！！！」

シャウラ「デiiiiiiiiイン！！！」

・・・3秒。

そして・・・デインの心は壊れていく・・・レックス、シャウラの命を捨てるか！

シャウラ達の命を助けるのか！？

レックスの命を捨てるか！？

至上最大の選択がデインに攻める！！

デインの選択は・・・

生か！死か！？

続く・・・

Chapter 2-5 賭けと信じる心

・・・後1秒。

デイン「うあああああああ！！！！！」

シャウラ「やめろおおおおおおお！！」

キングラー「ひやはははあああああ！！やっちまえカラナクシ！！」

カラナクシ「死ねえ！！！！」

デイン「うおおおお！！シャウラあああああああ（ニマツ）！シヤウラゝが死んじやうよゝ♪」

レイス「・・・えっ？」

キングラー「き、気が狂ったかお前^{デイン}ええ！？」

シャウラ「くそおおお！！！！サイコキネシスだゝ♪」

カラナクシ「うっ！！」

デイン「はい♪お次に電気を蛞蝓に食らわせましょう！！電気ショックゝ！！」

カラナクシ「ぐああああ！！」

カラナクシは倒れ・・・生を選んだデイン達？

デインとシャウラは演技の様に楽しんでた。

キングラー「生を選択するんだな！？ならこいつ（レックス）の命は！」

キングラーの目線はデイン達に向いていた。

デイン「やってしまいなさい♪」

キングラー「何!？」

シャウラ「どうぞどうぞ♪お構いなく♪」

レイス「どうしちゃったの二匹とも!？って、あれ!？」

キングラー「くっ！ならお構いなく殺してやるよー!!!!」

キングラーはハサミを振り落とした。

・・・だが!？

キングラー「・・・切った感触が・・・しない。」

デイン「はい♪次なる選択考えた♪」

レックス「選択、選択♪シャウラの選択♪」

キングラー「何!？」

レックスは何時の間にか キングラーのハサミから抜け出し背後にいた。

シャウラ「選択♪選択♪それはサイコキネシス!!!!」

キングラー「動かねえ！」

デイン、レックス「シャウラの選択はサイコキネシス♪」

シャウラ「選択♪選択♪君達選択♪?♪」

デイン、レックス『一斉にいっ匹で体当たり!!!!!!』

デインは前、レックスは後ろで前後の体当たりでキングラーに二重直接攻撃!!!

キングラー「ぐああああああ!!!!!!」

シャウラ「名付けて！」

デイン、レックス『ダブル・ダイレクトアタック!!!!』

キングラー「……くそ。」

デイン「さて……歌は終了。次なる選択はお前の命だよ。」

レックス「デインとシャウラの判決は♪」

デイン、シャウラ『半殺し!!!!』

レックス「えゝ、副裁判官として裁判官からのお言葉を頂戴致します！えゝ、デインさんお願いします。」

シャウラ「えゝ、まず一つ蟹さんデイルは裁判官に脅迫・・・二つは相手を利用して木の枝Ⅱ刃物を僕等『シャデイル！』に喧嘩を売ってき
た罰として・・・キングラーに半殺しを言い渡します。裁判官のデ
イルさん。お願いします！」

レックス「お願いします！！！」

デイン「はい、分かりました。」

キングラー「くそ・・・何で・・・何でええええ！！？」

デイン「僕等を脅したキングラー！僕の最大の技を喰らえ！・・・
十万ボルトオオオ！！！」

心の奥底から隅々まで怒りを全て十万ボルトとしてキングラーに罰
の電撃を与える！

キングラー「ぐぎやあああああゝ！！！！！」

そしてキングラーは少しの意識で目を開けていた
・・・。

キングラー「……くっ、どうしてだ……。」

ディン「賭けだ……。」

キングラー「賭……け……だ……と……。」

キングラーは到頭気を失った……。

ディン「上手く言ったなレックス、シャウラ。」

レックス、シャウラ『嗚呼。』

レイス「……どういう……事？」

レイスは啞然となっていた。

レックス「まあ、本当に気を失っていたけどな。レイス……。俺が目を開けてた時はキングラーのハサミで向けられてたよ。目が覚めたのはディンのお陰だよ。」

レイス「えっ？」

シャウラ「ディンは恐怖を紛れに大声をだしたんじゃない態と大声を出したんだ……。レックスを起こす為に……。」

ディン「まあ、それだけじゃあキングラーは気づかれるからキングラーの好奇心を利用して僕に集中させたのさ。」

レイス「好奇心……。生と死の選択の事……？」

デイン「たくっ、怯える演技は苦勞したよ……。」

レイス「けど何時の間にそんな作戦を？」

シャウラ「……やっぱそこに突くよな。キングラーがデインの方に目線が言ってた時にはレックスは起きてたんだ。だから俺は俺の”特殊な能力”を使ってレックスとデインに俺の作戦を聞いてもらった。」

レイス「特殊な能力？」

シャウラ「そう。俺には特殊な能力があるんだ……相手の脳の中に俺の声を届かせる事が出来るんだよ。けど、突然だからレックスが作戦に乗ってくれたり、驚いたりしていたら。ばれて死んでいたかもしれないかった……。けどレックスは信じてくれたんだ。」

レックス「ははっ、あん時は確かに驚いたよ。けどデインの態とらしい行動とシャウラの絶対的な思いで俺は信じた。」

デイン「そう、この作戦はレックスが僕等を信じてくれるかの”賭け”だったんだ。」

レイス「……凄いよ！」

デイン「ほとんど凄いのはレックスだよ♪レックスの信用が”賭け”に成功したんだ。」

シャウラ「レイスとレックスは良い探検隊になれるかもしれないな♪」

ディン「だな♪」

こうしてシャディルの依頼であるお尋ね者のキングラーを倒し、また、ディレックの依頼、落とし物の真珠をレックス、レイス、シャウラ、ディンの四匹が二つの依頼を全うした！

四匹はキングラーを硬く重視しギルドまで連れていき真珠は大切にレイスが胸の中で抱きしめていた・・・。

そして・・・ギルドに到着し・・・。

ディン「ジバコイル保安官！ただいまお尋ね者のキングラーを捕まえました！！」

ジバコイル「サスガ、チーム『シャディル』デス。イライレベルSランクノキングラーをつかまエルトハ！」

シャウラ「いや、俺達の力では倒す事も、捕まえる事も出来ませんでした

・・・。」

ジバコイル「ソレハ・・・ドウイウコトデシヨウ？」

ディン「それは、まだ新入りで優秀な探検隊『ディレック』のレックスとレイスの二匹がいたからこそです！」

ジバコイル「ソウデスカ！？アナタたちモキングラーヲタオシタノデスカ！？」

レイス「・・・はい。」

レックス「まあな♪（こいつの喋り方なんか腹立つな）。それに・
・ネジと鉄の球？・・・いや磁石か？うゝん、何だろう。」

ジバコイル「ソレハソレハ！」

コイル「オー！！！」

コイル「オー！！スゴイデス！」

ジバコイルの後ろにいるコイル達も感激していた。
後ろの磁石に褒められても今一だ・・・。
レックスは心の中で思った。

ジバコイル「シャディルトディレックニホウシュウヲサズケマス。」

コイル×2「サズケマス！」

レックス「あ、どうも。（何かうぜえー！普通に喋れよ！）」

シャウラ「良かったな♪レックス、レイス♪報酬だとき♪」

ディン「喜べ♪」

レックス「おう！」

レイス「・・・うん。」

レイスはしょんぼりとしていた・・・。

ジバコイル「イッピキニハウシュウ200ポケ。」

レックス「……（これってお金なのか？）」

シャウラ「さて、俺達の依頼は終えたから疲れたから自分の部屋に戻ってるよ。」

デイン「……だね。」

シャウラとデインは下の階へと移動した。

シャウラ「じゃっ、また後でな！」

デイン「さらば！」

レックス「おう、じゃあなく！あいつら良い奴だな♪なっ、レイス！？」

レイス「う、うん。……そうだね。ハハ……。」

レックス「……レイス？」

ジバコイル「ソレデハワタクシタチハモドリマス。ソレデハサヨウナラ」

コイル×2「サヨウナラ！！」

レックス「嗚呼、さようなら。（早く行ってくれ
……話すの面倒だ。）」

レイス「私も・・・部屋に戻ってるね・・・。」

レイスはレックスに小さく手を振りながら下の階へと降りて行った。

レックス「あ、嗚呼。・・・どうしたんだろう？・・・レイスは。」

ペラップ「レックス！」

レックス「はい！！」

すると急に後ろからペラップが呼んでくるから驚いたレックス。

ペラップ「落とし物は見つかったか？」

レックス「あ、ああ。これの事か？」

ペラップ「そうだ。依頼主が掲示板の前にいるから渡して報酬を貰いに行きなさい。」

レックス「あ、はい。」

やはりペラップの言う通り掲示板に依頼主らしき者が立っていた。

レックス「あの～？貴方が落とし物の依頼を頼んだ依頼主のバネブーですか？」

バネブー「そうです。」

レックス「この真珠？」

バネブー「あっ！そうです〜！！」

レックス「ぐああ！」

バネブーは嬉し紛れにレックスに思っきり体当たりをし、手から滑った真珠はバネブーがキャッチしていた・・・。

レックス「・・・（いてえな！このバネの様なブタは！？）」

バネブー「あゝ、良かった〜♪これ、命より大切な真珠何です！有り難うございます！報酬として・・・。」

バネブーからいろんな者を貰った。

バネブー「タウリンとリゾチウム、ブロムヘキシンです。戦いに役立つ物ですので使って下さい♪」

レックス「・・・そうですか？でもこんなに貰っても良いんでしょうか？」

バネブー「良いですよ♪あとそれから・・・。」

バネブーはまだレックスに報酬を渡した・・・それはポケ金であった。

バネブー「2000ポケです♪」

レックス「2000ポケ！？（ポケモンの金と人間界での金の凄さは分らないけど・・・多分2000ポケは相当な金額だと思う！意外に金持ちになったりして・・・？）」

バネブーはびっくりな顔をしていたレックスを見て笑っていた。

レックス「あの？良いんですか？こんな大金貰ってしまっ……」

バネブー「良いんですよ♪真珠と比べれば大した事ありません♪」

レックス「……そうですか。（まあ、命より大事な物って言うってしなあ……）」

バネブー「それでは有り難うございました♪」

バネブーはギルドから家に帰るらしい。

自分の足……いや、バネで帰って行った……。
転ばないのだろうか……。一生バネの生活で……。

いや転んだとしたら頭に乗っかっていった真珠をまた落したりするんじゃないだろうか……。

てか、命より大事な物なのに何で普通に頭に乗せるのかが分からなかった

……。

ペラップ「レックス！」

レックス「はい！！」

また脅かしやがった……。

ペラップ「報酬は貰ったか？」

レックス「はい、この通り……。」

レックスは全ての報酬をペラップに見せた。

するとペラップはお金だけを持って行った。

レックス「お金！」

ペラップ「えーと、レックス達の分はこんぐらいかな。レックス、今日の報酬金額だ。」

レックス「ええ！？200ポケー！？」

2000ポケから200　しか貰われなかった……。なる程……。ギルドの修行の厳しさの一つだろう。

元々の報酬金額は十分の一が探検隊（弟子）の物になり十分の九がギルドの金稼ぎと言うわけだと言うことを知った……。

レックス「……ショックだ。」

チリーン「皆さん！ご飯の用意が出来ましたよー！？」

皆「わーい！／待ってましたー！」

そして一番下の食堂室に皆集まり……。晩の飯を食べる事にした。

俺の横にはレイスもいた

・・・。

レイス「・・・ご馳走様でした。」

レックス「あれ？レイス

・・・少ししか食べないのか？」

レイス「・・・うん。なんだかお腹一杯なんだ・・・。」

レイスはまた自分の部屋へと戻って行った・・・。

レックス「可笑しいな・・・明日・・・聞いてみるか・・・。」

レイスの不機嫌の理由は何なのか？

続く・・・。

Chapter 3-1 時空の叫び

ドゴーム「起きろおおおおお!!!!朝だぞ!!?」

また新しい一日が始まる

・・・。

レックス「耳いいい。」

レイス「・・・レックス・・・おはよう。朝の朝会に遅れるよ・・・」

レイスは先に朝会へと向かった・・・。

昨日から元気がないのは何故だろう・・・。

ギルドの弟子達「みつつー、皆笑顔で明るいギルド♪」

ペラップ「皆!今日も仕事に取り掛かるよ!」

ギルドの弟子達「おー!」

誓いの言葉を言い終われば何時もの通りに皆は持ち場に取り掛かる。

ペラップ「お前等、またうろうろしてるな?付いてこい♪」

するとペラップは上の階の集会場へと向かった。

レックス「行こっか!?レイス。」

レイス「・・・うん。」

レックス「（調子が狂うな。）」

レックス達も集会場へと向かった。

ペラップ「今日はこっちの掲示板をやらしてもらおうぞ。」

レックス「あれ？前はあっちだったんですけど・・・？」

ペラップ「まあな、それよりこっちの掲示板をやらしてもらいたいのだ。」

レックス「あ・・・、はあ・・・。」

その掲示板のポスターを見てみると強者の様な者達が写っていた。

レックス「こいつらは・・・探検隊？」

ペラップ「いや、こいつらは皆お尋ね者だ。」

レックス「えっ!？」

外見から見ても強者に見える奴らがお尋ね者だとすると・・・手強い相手だとレックスは思った。

ペラップ「今日、一つ熟して貰いたいのだ。」

レックス「こんな強い奴等を倒せってか!？」

ペラップ「昨日、シャディルと一緒にキングラーを取っ捕まえたそうじゃないか？」

レックス「・・・そうだった。(卑怯な手を使った蟹を何とかシャウラ達と勝てたんだ・・・。)」

ペラップ「だから準備をして来い・・・。」

レックス「準備って・・・」

ペラップ「ビッパ〜!ビッパ〜!？」

すると大声で誰かの名を呼んでいた。

ビッパ「は〜いでス〜!」

するとビッパらしき者がこちらに近づいた。

ペラップ「ビッパ、こいつらの事は知っているな?」

ビッパ「勿論、知ってるでげすよ。」

ペラップ「そうか、ならこいつらに広場の案内をしてやって来れ♪私も持ち場に戻るの後は任せたぞ♪」

ビッパ「はいでげす!」

ペラップは下の階へと移動した。

レイス「レックス・・・私、空気を吸いたいから・・・外に出てるよ・・・。」

レックス「あ、嗚呼。」

レイスは上の階へと向かいギルドから出るらしい
・・・。

ビッパ「どうしたんでげすか？元気がない様な顔をしてたんでげすが。」

レックス「さあ、俺にも分からん。それより広場の案内って？」

ビッパ「あ、そうでげした！今から外を歩くので付いて来て欲しいでげすよ。」

レックス「外に・・・？」

レックスはビッパの後に付いて行きギルドへ外に出た。

するとギルドから離れて5分少しぐらい歩いていると広場を発見した。

そこにはいろんな探検隊達がうろちよろと歩いている。

ビッパ「此処がトレジャータウンでげす。此処には探検隊達が準備をする場所でもあるでげす。」

レックス「ふゝん。あのお化け屋敷の様な店は何だ？」

ビッパ「お、お化け屋敷って失礼でげすよ……。」

トレジャータウンの入り口から入ってすぐ横に気味が悪い店を発見した。

ビッパ「あそこはヨマワル銀行でげす。ポケ金を預けれるでげす。」

レックス「ふーん、あの店は、いいや後回しだな！」

ビッパ「あ、エレキブル連結店を聞かないのでげすか！？」

レックス「はあ、連結？そんなの聞ってるの面倒っちいから、他んどこ他んどこ♪」

ビッパ「あ、ちょっと待つでげすー！」

レックスはどんどん前へと進んで行った。

レックス「あのカクレオンの様な店は何だ？」

ビッパ「カクレオンのお店でいろんな道具が売っている所でげす。そして隣にあるのがガルーラの倉庫で自分の持っていた道具を預けたり引き出したり出来るでげす。」

レックス「ふーん、大体こんぐらいの案内で良いや……えーと……
・ビッパさん。」

ビッパ「……そうでげすか？」

レックス「有り難う♪」

ビッパ「いや、そんな！お礼されるだなんて嬉しくないでげすよ！」
嬉しそうじゃなか・・・？

ビッパ「それではギルドに戻るので何かあったら聞いて下さいでげす♪」

そしてビッパはギルドへと向かった。

レックス「此処がトレジャータウンか・・・。」

「カクレオンさ～ん！」

すると大きい声で叫ぶ小さなポケモンがカクレオンのお店へと走ってきた。

体が水色で丸い形をしていて尻尾もついているポケモンが二匹。

カクレオン「あ～っ♪ルリリちゃ～ん♪マリルちゃ～ん♪またお買物？」

ルリリ「はい♪」

マリル「あのリンゴを下～さい♪」

カクレオン「はいはい、リンゴね～♪」

ルリリ「有り難う♪」

そして二匹は元気そうに走って行った。

カクレオン「じゃあね〜♪」

カクレオンは手を振っていた。

レックス「あの子達は兄弟ですか？」

カクレオン「ああ、そうなんだよ♪可愛い子供達だろう？実はあの子達の母親が寝込んでしまっ
て・・・あの子達が母親の面倒を見てるんですよ♪本当、いい子達です
よね〜♪」

レックス「へえ〜。可愛いですね。」

ルリリ「カクレオンさん!!」

カクレオン「・・・？」

マリル「あの！リングが一つ多いですよ!？」

カクレオン「嗚呼、それは僕等からのプレゼントですよ♪貰ってくだ
さい♪」

ルリリ「わぁ♪」

マリル「有り難うございます!」

カクレオン「どう致しまして♪」

マリル「さて、行くよルリリ♪」

ルリリ「うん♪・・・うわぁ！」

マリル達はまた走ろうとするとルリリは足を滑らして転んでしまい
リングを転がした。

するとレックスの足まで転がってきた。

マリル「大丈夫かい？」

ルリリ「・・・うん。」

レックス「ほらよ、リング♪」

レックスはルリリにリングを渡した。

ルリリ「有り難うお兄ちゃん♪」

レックス「はは♪（お兄ちゃんか。）」

レックスはルリリにリングを返してルリリの頭を撫でた・・・。

それはひんやりしていて冷たくて触り心地良かった。ルリリ「へへ
♪お兄ちゃんじゃあね〜♪」

マリル「有り難うございます。」

二匹は走って行った。

レックス「じゃあ・・・うつ・・・。」

するとレックスは激しい目眩が襲ってきた。

レックス「め、目眩？」

《ギーン！！》

(た・・・、たすけてっ！！)

《ギュウウン。》

すると目眩から誰かの声が聞こえた。

レックス「(な、何だ今の・・・！？目眩？夢？だが誰かの声が聴こえた・・・これは・・・幻聴？)」

カクレオン「あんさん？どうしたんですかい？」

レックス「あ、大丈夫です。・・・気のせい・・・だよな。」

カクレオン「へっ？」

レックス「あっ、何でもないです。」

カクレオン「お兄さん、具合が悪いなら寝た方が良くと思いますよ？」

レックス「そうですね・・・そうします。」

そしてレックスはギルドに戻ろうとした時、前から見の覚えがある探検隊がいた。

リオン「あつ、あの時のレックスさん？」

レックス「あつ、リオンだっけ……。」

ローズ「あつ、レックスさん♪キングラーを捕まえたそうですね！」

リオン「そうなんですか！？一昨日入ったばかりなのに凄いですね！？」

「誰なの？」

リオン「ああ、紹介するよ♪ギルドの弟子入りしたばかりのレックスだよライル♪」

ライル「ああ、そうなんですか♪前にリオンに聞いた事あったよ。私はこの『絆』のリーダーリオンです！」

レックス「ああ、どうも

……。後ろにいるその強そうなポケモンは誰？」

「……。」

ライル「あつ、このポケモンはレンです。私以外のポケモンとは喋らないんですよ……。ちなみに彼氏♪」

レン「……。ライル、こいつらの前で言わないでくれよ……。」

ライル「分かった♪」

二匹は寄り添っていた。

俺の前で寄り添うな……。言いたい気分だが言わない事にしておく。

レックス「そうか……。悪いけど……。俺、気分が悪いらんだ。ギルドに戻っ

……。」

ライル「あつ、レックスさん！危ない！」

レックスは倒れそうになったときライルが背中を支えてくれた。

レックス「……。うつ（まだあの時の目眩が……。）」

ライル「……。これは……。）」

ライルは突然驚く様な顔をしていた。

レックス「あ、有り難うございます……。」

ライル「……。気にしないで下さい♪それより体調が悪いのでしたら体を休めて下さいね……。?」

レックス「そうするよ……。」

レン「……（ライルと馴れ馴れしく喋るな!）」

レックスはギルドの方向へと戻って行った。

ライル「皆あ、話があるの……。」

レン「……？」

リオン「どうしたの？」

ローズ「えっ？」

その時レイスは……。

《ザバアアン！》

レイス「はぁ……。」

レイスは海岸で一匹でぽちんと座っていた。

一方、レックスは……。

レックス「……くっ、やっと……目眩のリスクが緩やかになった……。」

レックスは歩いていた。

マリル「えっ、本当ですか!？」

マリルは誰かと話していた。

レックス「あつ、マリル、ルリリ。」

ルリリ「あつ、お兄ちゃん！また会った。」

レックス「どうしたんだ？」

マリル「あのですね、このスリープさんが私たちの落とし物を見た事があるそうなんです。」

スリープ「はい。見ましたよ。」

ルリリ「そしたらね、一緒にその落とし物を探しに行ってくれるって！」

レックス「そうなのか。良かったなルリリ！？」

ルリリ「うん♪」

スリープ「こんな可愛い兄弟が困っていたら助けたくなくなっちゃいますよ♪それじゃあ早く行きましょうか♪」

マリル、ルリリ

『はい！／うん！』

そしてマリルとルリリ、それからスリープが落とし物の方へて向かうとした時。

《どすっ》

スリープ「おっと、ごめんよ。」

レックス「あ、嗚呼。」

スリープの肩が当たって行った。

レックス「良い奴だな。」

・・・うっ！（また、目眩！？一体何なんだ！？）

《ギーン！！》

するとレックスは幻聴と幻視が見えた・・・。

スリープ（さっ！俺の言う通りにしろ！！）

ルリリ（たっ・・・、助けてっ！！）

《ギュウウン。》

レックス「ま、まただ・・・（これは何だ・・・一体・・・もしこの幻が本物だとしたら・・・。）」

レックスは考え込みながらギルドへと向かった。

レックス「一体・・・。」

ビッパ「あっ、レックス

・・・遅いでげすよ！？何をしてたんでげすか！？」

レックス「ちよっと・・・。」

ビッパ「・・・？・・・まあ、お尋ね者を一匹選んで欲しいでげす。」

《ギユウウン！ギユウウン！》

「情報交換をします！危ないので下がって下さい
・・・！」

《ゴオオオー！ガタ！》

レックス「なっ、何だ！？」

この警告が言い終えた後に掲示板が反対に裏返った。

ビッパ「嗚呼、これは情報交換をしてるんです。ギルドのダグドリオ一匹が新しい情報を入れ換えてるんです。」

レックス「ふん。」

《ガタッ！》

すると裏返っていた掲示板が表に戻り新しい情報（お尋ね者）が見られる
・・・。

レックス「・・・これは！」

レックスが見た物はお尋ね者のポスターの中にさっき前にあった事がある者がいた・・・。

それは・・・！

レックス「スリープ！」

レックスの目眩による宣告は本当だった・・・。

スリープがお尋ね者とすれば・・・。

レックス「あの兄弟が危ない！！！」

続く・・・

Chapter 3-2 燃え尽きるまで・・・

お尋ね者『スリープ』を知ったレックスはスリープを追いかける・・・。

レックス「待ってるよ！今行くぞ！・・・あ、あれはマリル！」

マリル「あっ、お兄さん！」

レックス「ルリリは、ルリリはどうした？」

マリル「僕も落とし物を一緒に探した後スリープがルリリをどっかに連れてっちゃって・・・！トゲトゲ山に向かって・・・。」

レックス「ぐっ、やっぱり・・・、トゲトゲ山は何処だ？」

マリル「あっちです！」

レックス「お前はそこにいてろ！ルリリは絶対に取り返す！」

マリル「・・・はい。どうか助けて下さい！」

レックス「嗚呼！」

そしてレックスはトゲトゲ山へと向かった・・・。

レイス「・・・あれ？レックス・・・一体何処へ・・・。」

レックスを見た視線は後ろ姿で走っている所だった・・・。

レイス「・・・レックス。」

ライル「貴女がレイスね
・・・？皆！？レックスの援護をお願い！！」

レン「分かった！」

リオン「・・・了解。」

ローズ「うん！」

三匹はレックスを追って行った。

レイス「えっ、一体どうしたの・・・？」

ライル「レックスが・・・危ないの。」

レイス「えっ？」

一方レックスは・・・。

レックス「あそこがトゲトゲ山か！」

レックスはトゲトゲ山に向かっていた・・・。

レックスはトゲトゲ山まで走りきった。

いざトゲトゲ山へ・・・

レックス「待ってろ……。ルリリ……」

（侵入者……。発見……。くくく……。）

一方……

レイス「えっ！？レックスが一人でトゲトゲ山に向かった！？どうしてそんな危ない所に……。」

ライル「分からない……。けど貴女の力が必要なの……。」

レイス「……私は……。レックスの力になんて……。出来ないよ。行ったって……。何も出来ない……。私は。」

ライル「何か……。あったの？」

レイスは更に頭を下げ……。悩みの訳を話す。

レイス「私は……。お尋ね者のキングラーと落とし物の依頼があった……。」

目をつぶりながら話すレイスであった。

キングラー（バブル光線！！）

レイス達（ぐっ！／うわあ！）

レックス（くっそ！負けてられるかあああ！電光石火あああ！）

キングラ（何！？）

レックス（くそ野郎めええ！）

キングラー（ぐああ！）

レックスは相手の攻撃に当たっても心を屈しずに立ち向かった・・・。

その時私は震えてた。

勇気がないから・・・

レックスには根性も勇気もあって・・・。

私はレックスに助けられちゃって・・・。

結局最後まで私は・・・

無力だった・・・。

ライル「ふうん、そんな事があったの・・・。」

レイス「ごめん・・・私は何も出来ない・・・だから」

ライル「だから行かないわけ？」

レイス「行っただって私は無力なの！」

レイスは涙を流した。

ライル「まあ、私にもあったな〜そういうの。」

レイス「・・・えっ？」

ライル「けど、私は屈しないよ・・・。何もできない自分は無力だ
と思うけど

・・・動かない自分は・・・最低に近いわ。」

レイス「・・・。」

ライル「・・・じゃあ私は行くよ・・・最低にはなりたくないから
ね。」

レイス「・・・待って！」

ライル「ん？」

レイス「私もなりたくない最低なんか・・・無力なんかには負けた
くない！」

ライル「・・・ふふ、そうこなくっちゃね♪」

レイス「ライル！行こう！！レックスが待ってるよ！」

ライル「うん！」

レイスとライルはトゲトゲ山へと向かった・・・。

レックス「・・・ちっ、やっぱり先には行かしてくれない様だな。」

レックスの目の前には何十匹ものポケモン（敵）がいた。

イシツブテ「丸くなる！体当たり！！」

イシツブテは丸くなるで防御を上げ・・・それを利用して体当たりを攻撃に使った。レックス「ふん、遅いな！！」

レックス「電光石火！」

レックスは電光石火でイシツブテに攻撃した

・・・が。

イシツブテ「ふん、痛くもないな。」

レックス「くっ！かってえ！！」

イシツブテの元々の防御力と丸くなるで防御を上げている。

簡単には倒せない事になる。

イトマル「糸をはく！」

レックス「・・・うつ！く、蜘蛛の糸？」

レックスはイトマルの糸をはくで動きが鈍くなった。

ワンリキー「けたぐり！！」

レックス「ぐああ！肩があ・・・！！」

強烈な痛みにレックスは倒れ・・・起き上がれ様にも起き上がれない。

イトマル「毒バリ！」

レックス「うつ・・・！（な、何だから・・・だが。）」

レックスは完全に瀕死状態に近かった。

ニドリーノ「終わりにしちゃおうぜ？」

ニドリーナ「だね。」

ドードー「じゃあ僕が留めを・・・。死ねえ！」

ドードーは自慢の嘴でレックスの首を思いっきり突こうとしたが・・・。

レン「放電!!」

ローズ「マジカルリーフ!!」

リオン「はっけい!!」

するとレックスを追い掛けてきた者達がレックスを助太刀にきた。

イトマル「に、逃げろ!!」

そしてポケモン達は逃げて行った。

リオン「ふう、レックス大丈夫・・・レックス!？」

レックスの肩は酷く体中に毒の針が刺されていたのだった。

ローズ「や、やばいわ!速く毒を抜かなきゃ!」

レン「肩が酷いな・・・。」

そしてローズ達は毒の針を全て抜き取り毒薬になるモモンの実を果汁にして飲ました。

するとレックスは少しずつ目を開けて行った。

レックス「あ、あんた達は・・・絆の・・・助けに来てくれたのか?」

リオン「そうだよ。どうしてトゲトゲ山なんか
・・・?」

レックス「あ、そうだ！行かなきゃ……。うっ！」

レックスは上半身を起こそうとしたが肩の痛みが激しく起きる気にもならないくらいだった。

ローズ「あ、安静にしてなさい？肩が外れてるの動いちゃだめよ。」

レックス「いや、止めないでくれ。あいつを助けなくちゃいけないんだ！」

リオン「む、無理しちゃっ！」

レックスは無理矢理、下上半身を起こしてさらに奥へと進んだ。

レックス「今、行くからな……。」

レックスは肩を押さえ……。リリルの元へと向かった

……。例え

命が燃え付きてでも……。

Chapter 3 闇の正義

レックス「ぐっ、待ってろよ!? ルリリ!!」

リオン「どうしてそこまで……。」

レックスは肩を痛めてしまっていた……。

レックスは痛みを伴っても歩いて……歩いて……歩くことは止めなかった。

リオン「ライルと同じだ
……困っているポケモンを見過ごせない……と言う思いが……。」

イトマル「毒バリ!!」

すると何処からか攻撃を仕掛けてくるポケモンがいた。

レックス「ぐっ、喰らってたまるか!」

レン「放電!!」

放電で毒バリを防ぎレックスは助かった。

レックス「助かったよ……有り難う。」

レックスはまた歩きはじめた。

イトマル「糸をは・・・」

ローズ「葉っぱカッター!!」

イトマル「うわああああ!!」

イトマルが技を繰り出す前にローズはイトマルを粉碎する。

レックス「待ってろ・・・。ルリリ・・・。」

リオン「・・・レックス。」

どうしてそこまでして頑張れるのかとリオンは思っていた。

スリープ「くくく・・・。」

ルリリ「スリープさん、本当に此処に私の落とし物があるの?」

スリープ「・・・。」

ルリリ「スリープ・・・さん?」

スリープ「ごめんね・・・此処には落とし物はないんだよ。」

ルリリ「え?」

スリープ「・・・。(ニヤリ)」

そしてルリリが優しそうなスリープだと思っていたスリープは不適

な笑みを本性を表した・・・。

ルリリ「た、助けて！」

スリープ「ほら良い子だから言う事聞いてくれ？くくつ。」

ルリリ「だ、誰か！助けて！！」

スリープ「ちっ、聞き分けの悪い餓鬼だな！？あそこにある小さな穴に入れば良いんだよ！！その穴の中には財宝が眠ってるらしいからそれを取ってくるんだ！」

ルリリ「こ、恐いよ・・・誰か助けてええええ！！」

ルリリは最大の声で叫んだ・・・。

そしてその声はレックスに届いた。

レックス「あの声はルリリ！！」

ローズ「誰か助けを求めてる！？」

リオン「行こう！」

レン「言われなくても分かってる・・・！」

そして全員は声のする方へて走って行った。

スリープ「良いから入れ！！誰も助けにこねえからよお！？」

ルリリ「いやだ！誰か助けて！」

スリープ「くっ！本当に聞き分けが悪い奴だな！

・・・なら痛みを知らないの良い子にはならないのかな・・・？」

ルリリ「嫌だ・・・助けて・・・お兄ちゃん・・・助けて・・・誰か・・・助けてえええ！」

スリープ「本当に悪い子だ！なら痛みを知れえええ！！」

レックス「待て！！」

スリープ「あん？」

ルリリ「ああ！お兄ちゃん！！」

レックス「無事だったかルリリ！」

ルリリ「お兄ちゃん・・・怪我が・・・！」

レックス「ふっ、気にすんな！これはただのかすり傷だ！俺はどじったから転んじまっただけの話しさ！」

スリープ「お前は、あんときの奴か・・・。」

リオン「あいつはお尋ね者のスリープ。」

レン「倒すまでだな。」

ローズ「手加減しません！」

スリープ「おーっと！これじゃ俺は不利だな。だが不利を有利にさせて貰うぜ！？」

レックス「何をするつもりだ！」

ルリリ「ひっ！」

するとスリープはルリリを持ち上げた。

レックス「そいつから離れろ！電光石火ああああ！」

レックスはスリープへと電光石火を出したが。

スリープ「近づくな！近づくとこの餓鬼は死ぬぞ！？」

レックス「何！？人質！」

スリープ「催眠術！」

スリープは催眠術でレックスの動きを止め・・・

スリープは更なる攻撃を仕掛けた。

レックス「……………」

レックスの眼は闇の眼へと導かれてしまった・・・

リオン「レックス？」

ローズ「まさか・・・。」

レン「戦いの予感だ。」

スリープ「レックスの敵はあいつらだ。」

レックス「……敵……あいづらは……敵。」

リオン「レックス！僕等は敵じゃない！！」

スリープ「お前を騙そうとしている・・・あいつらを倒せ・・・あいつらを・・・倒せええええ!!」

レックス「うおおおおお！！！」

レックスの眼は光なき眼となり・・・戦いだ。

Chapter 3-4 光と闇

レックス「うおおおおおおお!!」

リオン「ダメだ!完全に催眠術に飲み込まれてる!」

レン「ちっ!」

ローズ「スリープを倒すしか方法はないみたいですね。」

スリープ「はあ?俺を倒そうとすればこいつの命はないぞ!」

ルリリ「お兄ちゃん!」

スリープ「仲間割れをするのが楽しみだな!」

レン「生意気な奴だ!あいつをたお」

レックス「電光石火!」

すると横からレックスが電光石火でレンに攻撃をして来た。

レン「ちっ!」

レンはすれすれに避け、レックスから下がった。

レックス「電光石火!」

するとレックスはレンに攻撃をして来た。

レン「くっ！ならば眠って貰うしかない見たいだな！電光石・・・！！」

レックス「カウンター！！」

レン「ぐっ！・・・カウンターだと・・・。」

レンは電光石火を出す前にもカウンターを繰り出したレックス。

リオン「レン・・・！」

ローズ「レックスの動きを止めましょう！」

リオン「分かったよ！」

ローズとリオンは作戦に出た。

ローズ「ツルの鞭！！」

ローズはツルの鞭でレックスの片腕を封じた。

レックス「ぐっ！うおおおおお！！」

レックスはツルの鞭を引き裂こうとしていた。

リオン「その前に眠ってもらうよレックス！！喰らえ！はっけい！！」

レックス「ぐおおお！！させるかあああ！！」

レックスはもう片方の腕でリオンを攻撃しようとしたが・・・

レックス「ぐっ！ぐああああ”あ”！！！」

レックスはいきなり悲鳴を上げはじめた・・・。

怪我をした肩を抑えていた。

・・・怪我と言うよりも肩が外れていたからの様だ。

リオン「・・・！？」

ローズ「肩を抑えて・・・って、そうか！レックスは肩を痛めてたんだ！」

レン「肩を狙ってしまえば！！勝機がある！」

リオン「けど・・・レックスの肩を攻撃すれば・・・」

ローズ「レックスの肩が悪化する。（いや・・・可笑しくなるかもしれない。）」

「待って！！レックスを虐めないで！」

すると後ろから声が聞こえてきた・・・。

リオン「・・・レイス！？」

その声はレイスだった。

レイス「・・・レックスは催眠術で操られてるんだよね？」

リオン「う、うん。」

するとレイスは警戒なしにレックスの方へ向かった。

ローズ「あ、危ないです！レックスは今、操られています！レイスに攻撃してくるかもしれません！」

レイス「分かってる・・・。けど・・・レックスはレックスであつて・・・レックスは私と探検隊のチームで・・・パートナーだから。」

だから私が何とかしなくちゃ・・・！

レックス「ぐあああああああ！！！」

レイス「今行くよ！！レックス！」

そしてレイスはレックスの方へと向かった。

レックス「く、来るなあああ！！！」

レイス「レックス・・・私の事・・・覚えてない？」

スリープ「馬鹿め、催眠術にやられたポケモンに話すなんて・・・。」

レックス「・・・知らん！これでも喰らえ・・・！気合いパンチ・・・！」

リオン「あ、あれは気合いパンチ！レイス！危ない！！」

レックスの腕には既にツルの鞭はなかった。
それでもレイスは一步もひかなかった。

レイス「レックス・・・ゴメンね？私・・・悩む事沢山あって・・・
。私は本当に弱虫だよ・・・。レックスは強いね私・・・レックス
見たいになりたい。」

レイスは微笑んだ。

そしてレックスは気合いパンチをフルに達した。

レックス「喰らえ！気合いパンチ！！」

リオン「に、にげ！」

《ドガッ！！》

レイス「けはっ！！」

レイスは鳩尾みぞおちに気合いパンチが入った。

レックス「な・・・・・・何で
・・・何で避けない！？」

レイス「・・・レッ・・・クスは・・・私の友・・・達・・・怖く
ない。・・・へへ。」

そして微笑んだレイスはそのまま気を失った。

レックス「（な、何だこれは！）ぐあああああ！！！」

するとレックスの頭の中にレイスとの僅かな記憶が走馬灯の様に思
い出がレックスを惑わせる。

レックス「ぐ、ぐあああ！・・・れ、イス・・・。」

スリープ「何！？無理矢理催眠術から抜け出しただと！？」

レックスの目は闇から光へと誘った。

そしてレックスもレイスの側で気を失ったのだった・・・。

スリープ「お、起きろ！碌でなしが！」

リオン「レックスはもう動けない！もうお前だけだスリープ！！」

スリープ「はっ！？人質はまだ入るんだよ！ってあれ？」

スリープの腕にはルリリはいなかった。

ライル「幼い子の人質は良くないんじゃない？」

スリープ「何！？」

すると後ろにはライルがいてルリリを庇っていた。

スリープ「しまっ！」

ライル「大文字!!」

スリープ「ぐああああ!!」

ライルとスリープの間はゼロ距離で放たれた大文字であつた・・・。

よって・・・お尋ね者スリープは捕まえたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047y/>

ポケモンダンジョン空の探検隊

2011年11月4日04時17分発行